包茎手術@小３

ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
包茎手術＠小３

【Ｎコード】
Ｎ２０４２Ｏ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
私自身が小学校３年生のときに体験した包茎手術を題材として小説風にアレンジをしてみました。少年の苦悩が伝わればと思います。

手術決定までの経緯

隆は　男・男・女・男　という４人兄弟の長男でした。昭和中期、ごく一般的な家庭に育ちました。

隆は幼稚園時代、自分で包皮を剥いてみたこともなく、親から剥いて洗うことも教わりませんでした。おまけに木登りや棒のぼりなんてダメな少年でしたので、皮を剥くなどという経験は皆無でした。最初に亀頭を出したのは忘れもしない、小学校に入学した日の夜でした。父親の指示を受けた母親によって包皮を剥かれたのです。

いつものように一緒にお風呂へ入りました。体を洗ってもらい、浴槽に入ろうとしたそのとき、母親が「今日から小学生、お兄ちゃんだからひとつ覚えなくちゃね」といいました。そして「ちんちんの中には沢山ばい菌がたまってしまうから、毎日皮を剥いて綺麗に洗わなくちゃいけないんだ。やってみなさい」といわれました。でも当然、どうやって剥くかなど知りません。よくわからないという顔をしていると、いきなり母親の手が私のペニスに伸びてきました。そしてペニスの先端付近をつかんだかと思うと、皮を剥かれてしまったのです。７割くらいまでは問題なくいけましたが、そこで一瞬痛みを感じ、「痛い」といいました。一度皮を戻してくれましたが、再度力をいれて剥かれ、今度は一気に溝まで剥かれてしまいました。痛い～と泣き叫んだものでした。でもこれによって剥くことが出来るようになったのです。

「最初は痛いけどすぐなれるから必ず毎日剥くのよ」と言い渡されました。毎日一緒にお風呂に入っているから目の前でやらされます。やらなければ母親にまた剥かれてしまいますので、仕方なく自

分で少しずつ剥くようにしました。溝まで剥いたらお湯をかけてもらい、またかぶせる、という繰り返しでした。これがしばらく続きました。ちょっとたつと剥くことは痛みを感じないで出来るようになりました。

小学校1年生のときは毎日、親と一緒に入っていたので目の前で剥き、お湯をかけてもらうことの繰り返しでした。最初に一人で入浴したのは小学校2年生の夏休み明けくらいだったでしょうか。しばらくは一人の時と親と一緒の時が交互でした。当初は一人で入浴したときもしっかり洗っていました。しかし、だんだん面倒になっていきました。なので親が見ているときだけ、やるようになっていきました。小学校3年生になると毎日1人で入っていましたから、つまり全く剥いて洗っていませんでした。幸い、炎症を起こすこともなかったのです。親は時々口頭で「洗ってるか」と聞いてきましたが、見られることはありませんでした。

・・・と自分では思っていたのです。しかし親はちゃんと見ていました。実は父親が深夜、寝静まった頃に隆のちんちんが洗えているか確認しに来ていたのです。ふとんをめくり、パンツを少しさげ、ゆっくり皮をさげ、洗えているか調べました。数ヶ月に1度、これをやっていたようです。当然洗っていないわけですから汚れもたまっています。親はチェックした翌朝、いつも隆に「洗ってるか」と聞いていました。隆は「うん、やってるよ」といつもうそをついていました。「本当か？」となおも聞く父親に対し、隆は「大丈夫だって」と答えていました。しかしうそだということは父親もちゃんと知っていました。

何度いっても改善しないので遂に父親は怒ってしまいました。小3の5月連休、出かけるぞ、といって隆をおもちゃ屋に連れて行きました。そしておもちゃを1つ買ってくれたのです。そのまま家に帰

るのかと思いきや、次に向かった先は病院でした。

手術を受けて

おもちゃを買ってもらった喜びもつかの間、病院に連れて行かれてしまいました。親には何回も「何をするの」と聞きましたが、親は教えてくれませんでした。だまってついてこい、というだけでした。

名前が呼ばれ病室へ入りました。親と先生がいろいろ話していました。自分は看護婦さんにつれられて隣の処置ルームへ。パンツを脱いでここに入れて、といってかごを出されました。仕方なくいわれたとおりにしました。このときようやく、どこを治療されるのか、なんとなくわかりました。看護婦さんに「ちんちんに何かするの？」と聞きました。でもまさか手術だとは思っていなく、剥かれて洗われるのかな、と考えていたのです。

ベッドに寝ると先生が来て看護婦さんに体を押さえつけられました。そしてちんちんに麻酔が打たれたのです。隆は初めて経験する痛みに大泣きでした。その後、眠くなってしまい、気がついたときにはペニスに包帯がまかれていました。家に帰ってもまだ眠かったので、そのまま寝てしまいました。

トイレに行きたくなり目が覚めました。包帯がついたままではトイレに行けないので母親に伝えたら丁寧に包帯をはがしてくれました。母親がトイレまで付き添ってくれました。尿はしっかりと出ましたが、自分でもびっくりしてしまいました。親に剥かれたとき、自分が剥いたときの一番亀頭が出ている状態に、自分のちんちんがなっていたのです。今まで覆っていた皮はありませんでした。

トイレから部屋に戻ると、父親と1つ年下の弟がいました。そこでなぜ手術をしたのか、説明されたのです。何回言っても洗わなかったから皮の中は汚れていたし、洗っていないのに洗っているとうそをついていたから皮を切った、といわれました。弟には、ちゃんと洗わないとお前もこうしなきゃなんだから毎日やれよ、と説明していました。こうして隆は低学年にしてズルムケとなってしまったのです。

傷がなおったころ、学校が始まりました。運悪く、6月にはプールもはじまります。まだ3年生ですからタオルで隠すなんて習慣もなく、男子も女子も教室で裸になって着替えていました。よりによって隆はいつも着替えが遅かったのです。すぐに見つかってしまいました。一人の友達が「あれ隆君、そのちんちんどうしたの？」といったことからクラス中の視線が集まりました。変なの～何があったの～と注目されました。当然、クラスメイトはみんなかぶってました。「お父さんのと同じ形だ～」「むいてある状態だよね～」という声もありました。なぜそうなったのかもきかれましたが、それは答えませんでした。

小3のプールが終わる時期まではこんな感じが続きました。プール休みたい、とも思いましたが親が許してくれるわけないと思ったので言い出せませんでした。当時通っていたスイミングスクールも週に1回、必ず行かされました。そこの友達にも同じような感じでいわれていました。でも、みんなもだんだんあきてきたというかなれてきたというか、途中からいわなくなりました。立場が変わったのは小5のときでした。クラスメイトの一人が包皮炎になって包茎手術を受けました。それを聞いた同じ団地の子の親も、「うちもやっちゃおう」という感じで手術を受けさせました。結果的に小5で3人がズルム

ケ、となったわけです。小３・小４の時は周囲に誰もむけている人がいなくて辛い思いをした隆も、一気に２人の仲間を得て強くなりました。そしてそれ以降は、みんなから羨ましがられるようになったのでした。

手術を受けて（後書き）

今から何十年前の話ですが、今でもあのときのことはよく覚えています。うそをつくことには大変厳しい両親でしたから、皮を剥いて洗うという約束も破ってうそをついたらここまでされたのでしょう。今は亡き両親が偲ばれます。